

## 第五章 マイルズ侯

マイルズは、エドワードをロンドンブリッジの近くにある宿屋に連れて行きました。

路上の人々は、「ヘンリー王ご逝去！ エドワード王万歳！」と叫びました。

エドワードは自分の父親のことを思い、とても悲しくなって泣き出しました。

ヘンリー王は気難しい男でしたが、エドワードにはいつも優しくかったのです。

そして今や、王は死んでしまいました。

それから彼らは、もっと多くの叫び声を聞きました。

「エドワード王万歳！」

「ということは今、私が国王なのだ」とエドワードは目に涙を浮かべて言いました。

「王子、あるいは国王」とマイルズは言いました。

「あなたは今夜、私と一緒にいればよいのです。食べ物をいづらか食べて休みましょう」宿屋にあるマイルズの部屋は小ぶりでした。

ベッドが一つ、椅子が二脚、食卓一つに洗面台が一つありました。

エドワードはとても疲れていて、ベッドに倒れ込みました。

「食べ物の準備ができたなら、私を呼んでくれ」とエドワードは言いました。

少年が寒い思いをしているのを見て、マイルズは自分の上着でエドワードを覆いました。

「はい、陛下」とマイルズはほほ笑みながら言いました。

マイルズは食べ物をいづらか取りに行きました。

「あなたのうたげの準備ができています、陛下」

エドワードは手を洗って、食卓につきました。

マイルズも食卓につきました。

「待て」とエドワードは言いました。

「立ち上がるのだ。私はお前の国王だ。お前は私の命令を待たねばならぬ」

マイルズは立ち上がりました。

「よし、座ってよいぞ」

二人とも空腹だったので、食べ始めました。

夕食後、エドワードはマイルズを見て、「お前は王の勇敢な兵士で、お前は私によくしてくれる。お前の剣を私に渡して、ひざまずくのだ」と言いました。

エドワードは剣の片側でマイルズの肩に触れました。

「立ち上がるのだ、マイルズ・ヘンドン侯よ。今、お前は私の家来の一人だ」

マイルズは立ち上がり、笑いました。

エドワードは頭を食卓に乗せて眠り込んでしまい、マイルズはエドワードをベッドに連れて行きました。

「かわいそうに」とマイルズは言いました。

「おそらく、たっぷり眠ったら彼はまた元気になるだろう」

その夜、マイルズは床で寝ました。

翌朝、マイルズはベッドの上で眠っている少年を見ました。

「かわいそうに！」とマイルズは思いました。

「彼はあと1時間は眠れるな、私は市場へ行って、彼に新しい服を買ってあげよう」

ロンドンの路上では、誰もが新しい国王について話していました。

マイルズは彼らの話を聞きました。

「新しい国王は気が狂っているそうよ」と一人の年老いた女が言いました。

「彼は国王になりたくないと思っているの。自分がこじきだと言っているのよ！」

「ああ、彼は全てが間違いだと言っている」と一人の若い男が言いました。

「かわいそうな若い王様は気が狂ってるよ、すっかり狂っちゃってる」ともう一人の男が笑いながら言いました。

マイルズは考え始めました。

「もしかしたら、エドワードは私に本当のことを言っているのかもしれないぞ！ もしかしたら、エドワードはイングランド王なのかもしれない！」

マイルズは新しい服を持って宿屋に戻りました。

自分の部屋に戻ったとき、マイルズはとても驚きました。

エドワードが消えていたのです！

マイルズは直ちに宿屋の男のところに行き、「あの若い少年はどこだ？」と尋ねました。

「これはこれは！」と男は言いました。

「どうかお怒りにならないでください…」

「それで、彼はどこなのだ？」とマイルズは腹を立てて尋ねました。

「私の質問に答えるのだ！」

男の顔は赤くなりました。

「あなたが出かけていたときに一人の男がやって来て、少年を連れ去ったのです」

「男だと？」とマイルズは驚いて言いました。

「これはいかん！ それはおそらく、彼の父親だ…かわいそうな少年よ！ 二人はどこに行ったのだ？」

「ええとですね、二人はサウスウオークの方へと行きました」と男は言いました。

「そして二人は群衆の中に消えました」

「かわいそうなエドワード！」とマイルズは言いました。

「私はエドワードを見つけなくてはならない」

マイルズは宿屋から走り出て、彼の若い友達を探しにサウスウオークの方へ向かいました。

同じ頃、エドワードはジョン・キャンティの後について行き、ロンドンの外にある森を抜け、ある古い納屋へと行かなくてはなりませんでした。

納屋の中にはたくさんのこじきや泥棒、ホームレスがいました。

ジョン・キャンティは、彼らの大半を知っていました。

「何て奇妙な人々なのだろう！」とエドワードは彼らを黙って見つめながら思いました。

「彼らはどこから来ているのだろうか？」

「この少年は誰だい、ジョン？」と汚い服を着た、年老いたこじきが尋ねました。

「俺の息子だよ」とジョン・キャンティは言いました。

「違う」とエドワードは叫びました。

「私は彼の息子ではない。私はイングランド王だ！」

納屋にいた皆が笑い出しました。

髪が長く歯が一本もない年老いたこじきが、「イングランド王だって？ 彼は愚者の王だな」と言いました。

そして皆がまた笑いました。

エドワードはとても悲しくなりました。

間もなくすると、皆がエドワードに思いやりのないことを言っていて、エドワードは泣きたくなくなりました。

しかし、エドワードは泣きませんでした。

エドワードは隅に座り込み、「マイルズは私をここで見つけてくれるだろうか？」と考えました。

エドワードは疲れていて空腹だったので、すぐに眠りに落ちました。

翌朝、エドワードが目目を覚ますと、納屋にいた皆が眠っていました。

エドワードは素早くそっとドアを開けて、森の中へと走り去りました。

エドワードは最初の村までずっと走り、それから市場で立ち止まりました。

突然、エドワードはある声を聞きました。

「エドワード！」

エドワードが振り返ると、マイルズが見えました。

「ああ、お前に会えてとてもうれしいよ！」とエドワードはほほ笑みながら言いました。

「そこら中あなたを探しましたよ！」とマイルズは言いました。

エドワードはマイルズに、ジョン・キャンティについて話しました。

そしてマイルズはエドワードに、前日に市場で自分が耳にしたことを話しました。

「私はあなたを信じます、今ならあなたが国王だということがわかります、陛下」とマイルズは言いました。

「ヘンドン・ホールという私の家に行きましょう。そこはウェストミンスター宮殿から遠くありませんし、あなたが宮殿に戻る手助けになる計画を二人で考えることができます」

「お前が私を信じてくれてうれしいよ、マイルズ候」とエドワードは言いました。